

第58回 ヴェネツィア・ビエンナーレ
日本館展示プラン

出展作家

眞島竜男 Tatsuo MAJIMA

応募者

長谷川新 Arata HASEGAWA

Dancing Flesh, Tingling Blood

Solo Exhibition of Tatsuo MAJIMA

眞島竜男個展
肉躍る
血沸き、



上：重なった土／飛び出した土：
京都、PARASOPHIA、岸田劉生、
満洲について（の2時間のダイアグラム）
2015
提供：PARASOPHIA 京都国際現代芸術祭 2015

下：美術史ダイアグラム（粘土）
2015
ダイアグラム（粘土）

*Therefore prepare thee to cut off the flesh.
Shed thou no blood.*

したがって、ただちに肉を切り取る準備をなせ。
ただし、血は一滴も流すなよ。

— *The Merchant of Venice*, William Shakespeare
シェイクスピア『ヴェネスの商人』安西徹雄訳、光文社古典新訳

I 血と肉：ポスト-トゥルース時代における「人間と物質」

世界中で血が流されている。戦争やテロは絶えず、人があたかも「モノ」であるかのように扱われている。「人的資源-資本」、すなわち交換可能な「モノ」として人間が扱われるのはグローバル化と資本主義の体制の全面化でもある。こうした凄惨な状況では、あまりに思弁的で抽象的な議論も、高解像度に多様性を読みこんでいく議論も、空転してしまう。溢れんばかりの情報が浴びせられる生活のなかで、効率良くそれら进行处理するために、事実それ自体よりも、「本当にそうだったらいいのに」という願いや欲望を体現した「フェイクニュース」が跋扈する。現代美術もまた、こうした状況——ポスト-トゥルース時代の渦中にある。ここで求められていることは、人々の願いや欲望、すなわち「未来」を、「フェイクニュース」とは別な方法で体現することではないだろうか。際限なく増幅する不透明な「欲望」に形と輪郭を与え、社会と美術を同時に思考することができるように試みるが必要ではないだろうか。そこで前景化してくる、みんなに共通しつつ差異も伴って思考できる「免疫的」とも言って良い「仮設単位」として、「血と肉」を設定する。これらは無論、人が「モノ」へと移行する回路そのものではある。しかし「血と肉」は、「輸血」や「移植」によって自分の一部が他者になる可能性であり、同時に、「血脈」「血統」というようにある強固な共同体の縦軸を構成するものでもある。本展はこうした「血と肉」をめぐるポリティクスから、もう一度「未来」に向けて再出発するものである。「人間と物質」の「と」にかかっている諸力を測定すべく、眞島竜男が、日本館をめいいっぱい使い切ることによって、「血が沸き」「肉が踊る」という状況が達成することを目指す。

概要

II 作家選定理由

眞島竜男は、初期から一貫して、「近現代美術史」という近過去と、「社会」という現在の両方の営みへと自らの身体を投げこむことで制作を行ってきた作家である。とりわけ近年は大別して「粘土レクチャー」と「今日の踊り」のふたつを両輪としている。今回の展覧会において主要な位置を占める「粘土レクチャー」は、近現代美術史のあるトピックについて眞島が文字通り粘土を捏ねながらレクチャーを行うというものである。ここで重要なのは、眞島のレクチャーが「情報の一方的な伝達」にあるのではない、ということである。眞島の態度は、「ある複雑なものごとをわかりやすく解説する」のではなく、むしろ「複雑なものをもっと複雑にする」という態度である。日々「飲み込みやすく加工された」情報を大量に浴びる私たちは、眞島が語るのに合わせて造形され、変形し、倒れ、ちぎれ、混ぜ合わせられる粘土を目の当たりにするなかで、弾力ある歴史を咀嚼するかのような疲労を感じる。しかし同時に、その複雑化されたレクチャーは、他ならぬ粘土という物質のもつ有限性、物理的限界によって、拡散しすぎることすらもまた、免れているのである。語りと粘土は渾然一体となって、「いつか、どこかで起きたアート」が、「いま、ここにいるあなた」と絶対に関係していると告げている。ある歴史が抽象化されながらもアクチュアリティを失わずに共有されるその方法論は、ヴェネツィア・ビエンナーレにおいて、世界の様々な人々と共通の問いを説得的に立ち上げるにふさわしいものであると確信している。

III 展示構成：原点回帰としての建築、展覧会、パフォーマンス

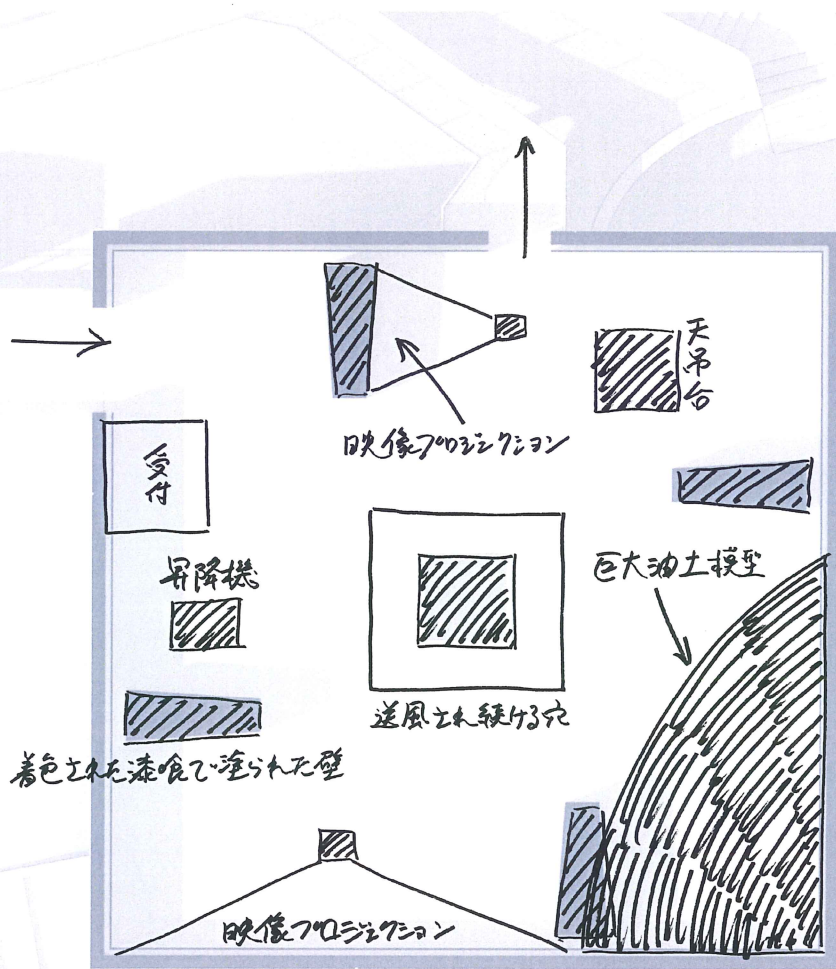
- ・ 本展は、眞島竜男の「粘土レクチャー」を中心に構成される
- ・ 展示空間は、吉阪隆正設計の日本館の設計思想および、日本館での初展示である1956年の展示を再解釈しつつ組み上げていく
- ・ 4つの壁は、山口長男の絵画に模したイエロー / 赤茶（石膏と塗料を混ぜ合わせマチエールが際立つようにする）をコテで塗りつけていく
- ・ 油土模型（多田美波の彫刻作品を考えるためのもの）や昇降機（搬入中使ったものを残す）、天吊り台（1956年の展示時に使用している）、映像プロジェクション（レクチャーの記録、壁を塗るプロセスの2つ）などを点在させ、眞島がそれらを用いて定期的にレクチャーを行う
- ・ 日本館は4つのユニットが組み合わせる形で設計されており、その結果中央部に穴があるのだが、ここには空調（ダイソンのような羽根のないもの）を設置し、随時風が穴から吹き出ていくようにする（建築の構造を可視化し、穴を最大限肯定するとともに、油土や粘土の匂いを低減する）
- ・ 粘土レクチャー終了後に痕跡として残存している粘土もこの穴からピロティ部分に投下し、ピロティ部分に常設されている展示台に設置していく。こうすることで建築全体をめいいっぱい使う循環構造を導入する
- ・ 粘土レクチャーは
 1. 1956年の日本館での展覧会
 2. 彫刻家・多田美波
 3. 山口長男の1956年の展示出品絵画
 4. 近代における建築資材（セメント、レンガ）と献体
 などを想定している。（多田美波はアルミニウムやガラスを用いた野外彫刻やシャンデリアなどで知られているが、一定回数献血を行うともらえる記念品（冷酒グラス）のデザインもしている。）
- ・ パフォーマンス期間は「日本人」として眞島が申請なしで滞在できる「3ヶ月」という期間を軸に構成予定（なお眞島が日々続けている「今日の踊り」についてはヴェネツィアでも継続実施）
- ・ 粘土レクチャーは英語で行い、レクチャーを実施しない日には記録映像をプロジェクション予定。レクチャー時もプロジェクターで映像を別途使用する
- ・ ピロティ部分には乗用車を1台常駐させ、映像（1956年展示の様子、ヴェニス商人に関する映像）などを窓部分に設置
- ・ 本展ではアーティストとキュレーターの協働を積極的に志向していく

第58回 ヴェネツィア・ビエンナーレ

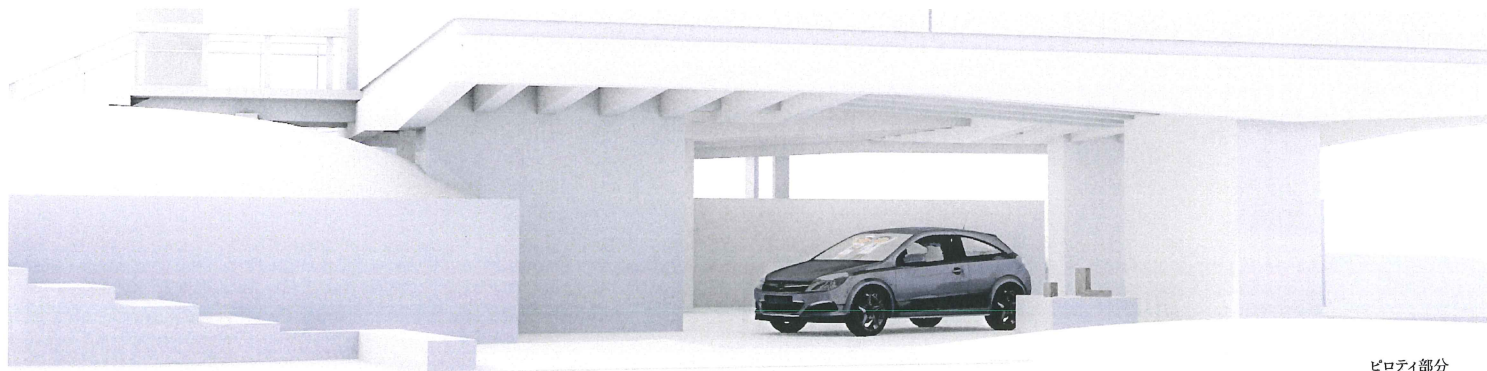
日本館展示プラン

眞島竜男／長谷川新

展示プラン



2



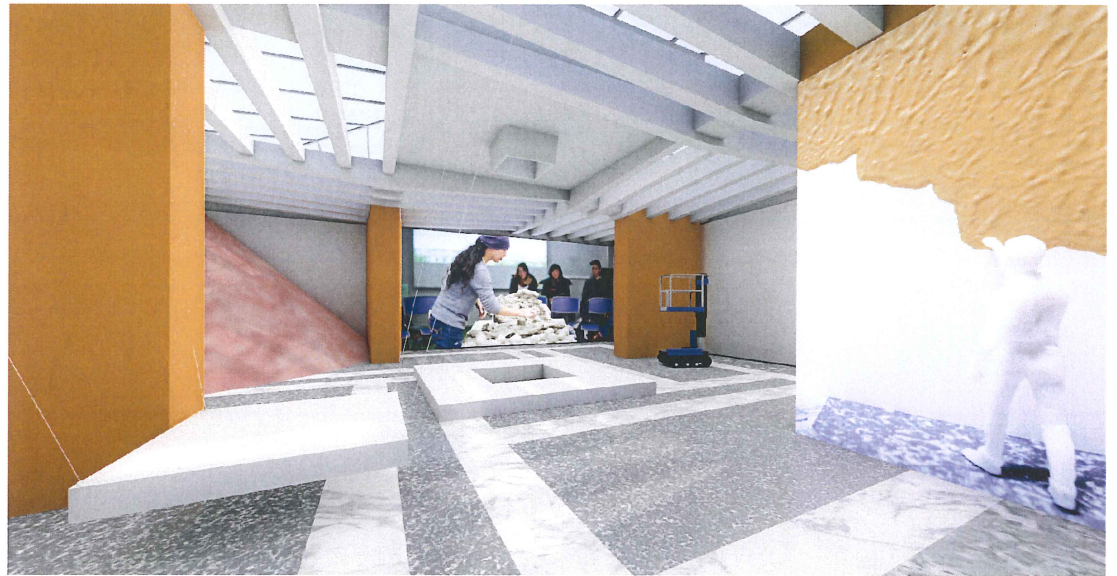
ピロティ部分

第58回 ヴェネツィア・ビエンナーレ
日本館展示プラン
—
眞島竜男／長谷川新



入口から見た図

出口から見た図



1. 着色された漆喰で塗られた壁
2. 送風され続ける穴
3. 巨大油土模型
4. 映像プロジェクション（壁塗りの記録映像）
5. 映像プロジェクション（レクチャーの記録映像 / レクチャー時にも使用）
6. 天吊台
7. 昇降機



予算概要

制作費	600万円		
輸送費	500万円		
施工費	700万円		
管理運営費	1,000万円		
関係者旅費	250万円		
広報宣伝費	400万円		
通信費	30万円		
カタログ制作費	400万円		
その他雑費	120万円		
		合計	4,000万円

第58回 ヴェネツィア・ビエンナーレ

日本館展示プラン

眞島竜男／長谷川新

個展	2015	「レオナール・フジタ×眞島竜男」鳥取県立博物館、鳥取	
	2014	「眞島竜男：回顧と展望」TOLOT/heuristic SHINONOME、東京	
	2012	「無題（栄光の彼方に／All the right moves）」TARO NASU、東京	
	2010	「北京日記」TARO NASU、東京	
	2005	「The Incredible Shrinking Pizza」Hiromi Yoshii、東京	
	2000	「美人丸」ナガミネプロジェクト、東京	
	グループ展	2016	「岡山芸術交流2016 Development／開発」岡山県天神山文化プラザ、岡山
		2015	「PARASOPHIA 京都国際現代芸術祭2015」京都市美術館、京都
		2014	「灰色」佐賀町アーカイブ／ドラックアウトスタジオ、東京
			「Amerika: idea/fantasy/dream/myth/image」Camberwell Space、ロンドン（英国）
2013		「大野一雄フェスティバル2013」BankART Studio NYK、神奈川	
2007		「六本木クロッシング2007：未来への脈動」森美術館、東京	
2003		「Sharjah International Biennial 6」Sharjah Museum／Expo Center、シャールジャ（アラブ首長国連邦）	
2002		「第一回 府中ビエンナーレ：ダブルリアリティ」府中市美術館、東京	
2000		「VOCA展2000」上野の森美術館、東京	
1997		「On-Camp/Off-Base」東京ビッグサイト、東京	
1995	「Departures」レントゲン藝術研究所、東京		
	「Exotic Excursions」28 Fouberts Place、ロンドン（英国）		
粘土レクチャー	2016	「開く、折れたたむ、反転する、閉じる：河原温ダイアグラム（粘土）」豊田市美術館、愛知	
		「眞島竜男 レクチャー・パフォーマンス」松末権九郎稲荷神社、福岡	
	2015	「美術史ダイアグラム（粘土）」、枝光本町商店街アイアンシアター、福岡	
レクチャー		「『満洲レスリング』のためのダイアグラム（粘土）」blanClass、神奈川	
		「PARASOPHIA オープンリサーチプログラム 10-4『重なった土／飛び出した土：京都、PARASOPHIA、岸田劉生、満洲について（の2時間のダイアグラム）』」京都精華大学、京都	
	2016	「ラレー街11番地のFoujita／藤田」豊田市美術館、愛知	
	2015	「PARASOPHIA オープンリサーチプログラム 10-1, 2, 3」flowing KARASUMA／京都文化博物館、京都	
		「フジタ・ダイアグラム」鳥取県立博物館、鳥取	
	2014	「アートはどこから来たのか」（全6回）清島アパート、大分	
		「眞島竜男 連続レクチャー@アラフドアートアニュアル2014」（全4回）旧いまずや旅館、福島	
2013-2014	「どうして、そんなにも、ナショナルなのか」（全12回）blanClass、神奈川		
パフォーマンス	2017	「山と群衆（大観とレニ）／四つの検討」blanClass、神奈川	
	2015	「ツグジ・ファインダー」旧クラブ紬、鳥取	
	2013	「出張blanClass@森美術館 眞島竜男」森美術館、東京	
	2012-	「今日の踊り」YouTubeで配信	
		「眞島竜男 踊ります」国政選挙の投開票日にライブ配信	
	2010	「鶴沼相撲／京都ボクシング」blanClass／TARO NASU、神奈川／東京	

出展作家

眞島竜男

TATSUO MAJIMA

3

1970

東京都に生まれる

1990-1993

Fine Art, Goldsmiths,
University of London (BA)

神奈川県にて制作、活動

第58回 ヴェネツィア・ビエンナーレ

日本館展示プラン

眞島竜男／長谷川新

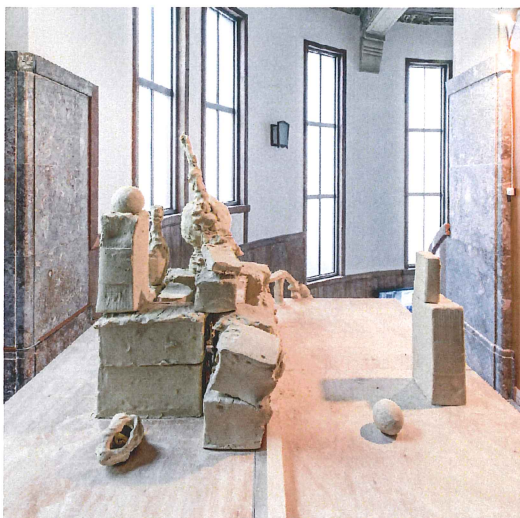


重なった土／飛び出した土：
京都、PARASOPHIA、岸田劉生、満洲について
(の2時間のダイアグラム)

2015

ダイアグラム (粘土、ベニヤ板)、ビデオ

ビデオ：2時間42分3秒



重なった土／飛び出した土／満洲レスリング

2015

ダイアグラム (粘土、ベニヤ板ほか)

上：『満洲レスリング』のためのダイアグラム (粘土)

2015

ダイアグラム (粘土、ベニヤ板、彫型べら)、ビデオ

ビデオ：58分50秒

中：開く、折りたたむ、反転する、閉じる：河原温ダイアグラム (粘土)

2016

下：美術史ダイアグラム (粘土)

2015

ダイアグラム (粘土)

世界について隈なく話し続けていたらすべてを語り終える前に世界が減じた、といったSF的な挿話がある。歴史とはこのバッドエンドを回避すべく存在していることはいままでもない。しかしそれゆえに、歴史には省略、偏り、矛盾などが含まれている。眞島は粘土という物質を捏ねながら、近代や美術史という形なき歴史に形を与えようとする。より有限なものへと次元へと引き下げると言ってもよい。粘土レクチャーは歴史の凝りをほぐすと同時に、その滑らかな叙述に潜む偏りや破綻を造形として表出させる。河原温の作品が孕む戦前と戦後の連続性について、岸田劉生の油絵画のマチエールと満洲の大地について眞島が語っていくその瞬間ごとに、粘土の物理的限界と、美術史の限界は一致する。粘土は表現しきれないがゆえに、雄弁になるのである。

第58回 ヴェネツィア・ビエンナーレ

日本館展示プラン

眞島竜男／長谷川新



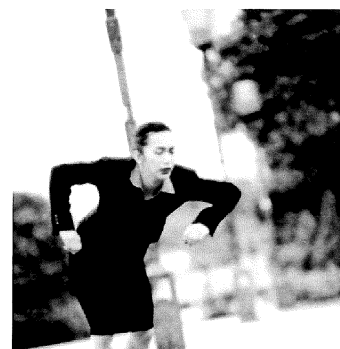
今日の踊り
Dance of the Day
2012-
毎日撮影しYouTubeにアップロード
各2分

「今日の踊り」は、眞島が毎日欠かさず踊り、その様子を撮影した約2分間の動画をYouTubeにアップロードするプロジェクトである。

その最初の営みは、2012年12月17日から2013年7月20日の間、すなわち、東日本大震災が起こってから最初の衆議院選挙と参議院選挙の間に行われたのだが、やがて日々流れ去る時間に形を与えるべく、眞島は毎日踊り始めた。

特筆すべきは、衆参いずれかの選挙日に行われるイベントであるが、それは投票をしたことを眞島に告

げた人の数×1分、眞島が踊り続けるというものだ。直接あるいはメールやSNSを通して数百人が眞島に投票へ行ったことを告げ、眞島は数時間に渡って踊り続ける。眞島の労働の持続が、そしてその結果彼の身体に刻々と蓄積されていく疲労が、民主主義という不可視のシステムに形を与える。



眞島は美術と社会との間に分割線をおかず、その混合物へと身体を投げこんで自らも混ざり合いながら思考しようとする。

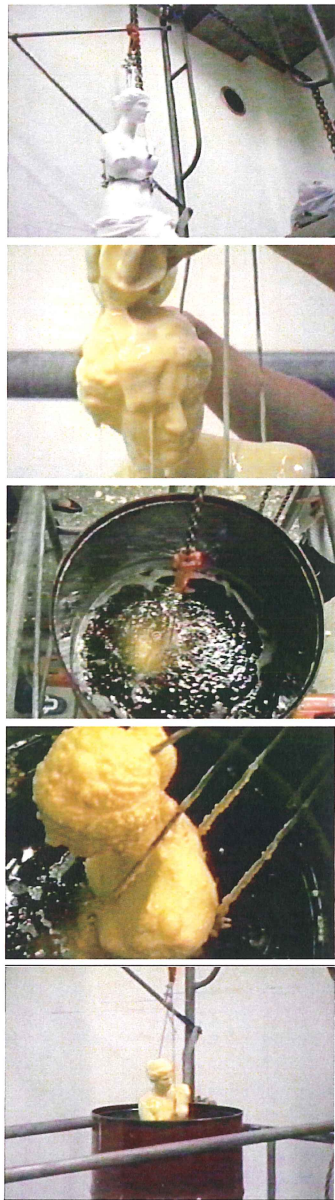
大真面目に「美人丸」（「ビジョマル」というサポテンにちなんで命名されている）を演じる眞島からは、ハリウッド映画から任侠映画まで、さまざまな表象がポトポトとこぼれ落ちていく。

美人丸
Bijinmaru
1998, 2000
ゼラチンシルバープリント

第58回 ヴェネツィア・ビエンナーレ

日本館展示プラン

真島竜男／長谷川新



かつてルチアーノ・ファブロは金製のイタリア半島を吊ってみせたが、真島はカラッと黄金色に「ミロのヴィーナス」を揚げた。

真島の制作には初期から「美術史」を造形しながら思考するという方法論が備わっている。この作品は完成品のみを鑑賞すると「レイヤー（外層）」に意識が向くが、記録動画を見れば、もっと不定形な何かが生成しているように感じられるだろう。

衣付きソーセージ（垂懸のための引き揚げ）
Sausage in Batter (A Salvage to Salivate)

1994

石膏像、小麦粉、卵、牛乳、食用油、
建設足場、チェーンブロック

展覧会歴抜粋

OPEN SITE 2017-2018 「不純物と免疫」展

TOKAS本郷、東京／BARRAK1、沖縄、2017-2018、チーフキュレーター

参加作家：大和田俊、佐々木健、谷中佑輔、仲本拓史、百頭たけし、迎英里子

「クロニクル、クロニクル！」展

クリエイティブセンター大阪、大阪、2016-2017

参加作家：荒木悠、伊東孝志、大森達郎、荻原一青、川村元紀、清水九兵衛、斎藤義重、笹岡敬、清水凱子、ジャン=ピエール・ダルナ、鈴木崇、遠藤(高木)薫、田代睦三、谷中佑輔、牧田愛、三島喜美代、持塚三樹、吉原治良、リュミエール兄弟

「パレ・ド・キョート／現実がたてる音」展

ARTZONE / VOXビル、京都、2015、キュレーター、最終日のイベントのオーガナイズはDJもしもしとの協働

参加作家：Akashic、網守将平、荒木悠、Iku Sakan、内橋和久、MC MANGO、L?K?O、大城真、大和田俊、置石、OLEO、危口統之(悪魔のしるし)、工藤冬里(maher shalal hash baz)、幻衛奇太郎、core of bells、小西紀行、自炊、Jon yon sunとジョン(犬)、関口大和(YAMAT)、ダダリズム、田中功起、多和圭三、中山晃子、hyslom、百頭たけし、BING、風能奈々、古川麦、POLYPICAL、水内義人、百瀬文、森岡友樹、yugue、YPY(日野浩志郎)

「無人島にて——「80年代」の彫刻／立体／インスタレーション」展

京都造形芸術大学ギャラリー・オーブ、京都、2014

参加作家：上前智祐、笹岡敬、椎原保、殿敷侃、福岡道雄、宮崎豊治、八木正

「北加賀屋クロッシング2013 MOBILIS IN MOBILI—交錯する現在—」展

コーポ北加賀屋、大阪／CASHI、GALLERY MoMo Roppongi、東京 / 問屋まちスタジオ、金沢 2013-2014、チーフキュレーター、金沢巡回展については松島英理香との共同キュレーション

参加作家：梅沢和木、河西遼、川村元紀、高橋大輔、武田雄介、二艘木洋行、百頭たけし、三輪彩子、百瀬文、吉田晋之介

受賞／助成／出版

- ・ トーキョーワンダーサイト OPEN SITE 2017-2018 プログラム採択 (2017)
- ・ 大阪創造千島財団スペース助成 (2016、2017)
- ・ 大阪市芸術振興事業助成 (2016、2017)
- ・ 「北加賀屋クロッシング2013 MOBILIS IN MOBILI—交錯する現在—」展カタログ (constellation books、企画・執筆、2014)

応募者

長谷川新

Arata HASEGAWA

インディペンデント・キュレーター

4

1988

アメリカ、ユタ州に生まれる

2011

京都大学総合人間学部卒業(文化人類学専攻)

現在

PARADISE AIR 2017-2018年度

ゲストキュレーター

日本写真芸術専門学校講師

日本建築学会書評委員